

<研究ノート>

和敬塾の社会人基礎力教育

—— 共同生活を中心に ——

信 夫 千佳子

1. はじめに

最近、多くの大学では「社会人基礎力」¹⁾ をどのように育成するかについての検討が始まっている。その育成方法については検討段階であり、教育方法の構築と実践が期待されている。

「和敬塾」²⁾ では、社会人基礎力ともいうべき能力を身につけるための事業を展開している。同塾は、大学教育を補完する形で、生活をともにしながら社会人としての人格形成に重点を置く教育を行ってきた。必ずしもエリート教育を目指しているわけではなく³⁾、大衆教育の質の向上を目指して、知

1) 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会 中間取りまとめ」によれば、社会人基礎力として、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力を挙げている。（「経済産業公報」経済産業調査会，No.15946，平成18年2月22日，5頁。）

2) 財団法人和敬塾，筆者調査，2009年5月10日。当日は岩崎嘉夫専務理事へのインタビューと施設および塾祭見学を行った。岩崎嘉夫「和敬塾の共同生活を通した人間形成」全国四系列（経営学・商学・会計学・経営情報科学）教育会議第26回大会，桃山学院大学，平成21年8月8日の報告を参考にした。岩崎嘉夫専務理事へのインタビューと報告は重なる内容もあるので，合わせて脚注に「岩崎嘉夫」と表記する。

3) 必ずしもエリート高校出身者にこだわらない姿勢である。かつて神戸の灘高校から大量の申し込みがあったが，入塾を断っている。（上坂冬子『教育の忘れものー東京の学生寮・和敬塾』集英社，207頁。）塾生の出身地や大学一覧を見ると，偏りがなく，よく分かる。現在の国内出身地は，福岡41名，広島30名，愛知25名，大阪22名，兵庫20名，北海道18名，千葉14名，栃木11名，埼玉9名，奈良9名，和歌山5名…などである。

キーワード：和敬塾，社会人基礎力，共同生活，コミュニケーション，大学教育

性と徳性を身につけ、社会との融和を大切する学生を育てるものである。

本稿では、そのような和敬塾の教育と運営を参考にしながら、大学の社会人基礎力の育成について検討してみたい。

2. 和敬塾

和敬塾は、男子大学生のための寮を母体として、教育的支援を行っている塾である。大学の学生寮のように当該大学に通学する学生のみを受け入れる付設の寮ではない。東京の目白に位置していることから、東京地区の大学に通学するために地方から上京した大学生を広く受け入れている。このように、特定の大学に属さず、複数の大学から学生を受け入れている寮としては、和敬塾の他に、友愛学舎、信愛学舎、山手学舎（3つ共にYMCAが運営）、登戸学寮、および各都道府県の県人寮などがある。そのほとんどは、数十人の小規模な寮であり、県人寮のように、老朽化や運営上の問題から廃寮になったところも多い。和敬塾は近年も受け入れ学生を維持し、常時500人以上の学生が生活している。

（1）和敬塾の創設経緯

和敬塾の創設は、企業家である前川喜作の社会事業として始まる。前川喜作は、明治28年5月15日に奈良県に生まれ、大正9年早稲田大学卒業後、大正13年（1924年）に前川製作所を設立する。前川喜作は、同社を産業用冷凍機メーカーに育て上げる一方で、国民が食べるのにも事欠く第二次世界大戦後の復興期に、若い学生はもっと本当のものを相手に、本当の真理を相手に生きていかななくてはならないと考え、1955年に財団法人和敬塾を設立し、塾長となる。前川喜作が60歳の時であった⁴⁾。

前川喜作塾長は、戦後の教育制度が、知識偏重に傾く有様を憂う一方で、学校ばかりに責任を負わすことはできないとし、学校教育を補足しながら協

4) 和敬塾塾友会『和と敬とー前川塾長語録ー』講談社、昭和58年、1頁、138頁。

力する方策として、東京で学ぶ学生のために、共同生活の場を提供し人格形成に力をいれた和敬塾の創設を決意する⁵⁾。その目的にふさわしい塾の候補地を求めて探すものの、なかなか適地が見つからず、4年の歳月が流れた頃に、東京都文京区目白台の細川邸7000坪の情報もたらされる。にわかに私財を売却して資金を捻出し、そこを塾の拠点とする。前川喜作塾長が、国や企業の援助をあてにせず、借入金にも頼らずに、一個人の私財を投じたのである⁶⁾。このような和敬塾を創設した時の想いを次のように語っている。

「青年のため一層強力な組織的な常住実践の場、精神生活、すなわち人間教育の場への前進が必要と考えられ、周囲の反対を押し切って3億5千万円の全財産を投じて、和敬の精神による和敬学生寮建設への発展を決意したのであって、このことは、当時としては実に無謀の挙とさえ評せられたのである。」⁷⁾

「もともと自分の財は預かりものだ。託された財は社会にお返しして死んでゆきたい。それが自分の責任と義務である。」⁸⁾

これに対して前川喜作塾長の関係者からは、批判や心配の声が相次いだ。必要な資金があまりに膨大で、個人の寄付に負うには巨額すぎる。運営上の予想外の出費に対してさらに資金を注入しなければならないかもしれない。また、若者は実社会のことについて疎い者が多いから、塾経営の犠牲への認識を持たずに、不愉快な事態も発生しないとも限らない。このように最初か

5) 同上書、25頁～26頁。

6) 佐々木良夫・加藤怜子編『和敬塾五十年の歩みとこれから』和敬塾、平成18年。「WAKEIJUKU」(和敬塾案内)2008年10月、7頁。当時の新聞には、「3億の私財を投げ出して 旧細川邸に学生寮 東京の一実業家が快挙」朝日新聞、昭和31年7月21日、「部屋に暖房、庭にキジ 前川さん寄付 学生寮、近く完工式」毎日新聞、昭和32年5月27日などがある。

7) 上浦種一編『和敬塾10年の歩み』和敬塾、昭和43年、12頁。

8) 同上書、12頁。

ら経営困難なことが予測される事業よりも、寄附金を確実な方面に投資して、その運用によって得た利潤を全額有能な学生に与えることにしたならば、毎年少なくとも3千万円ないし4千万円を分け与えることができるのではないか⁹⁾。このような様々な憂慮や進言に対して、前川喜作塾長は次のように答えている。

「一体、経営が難しいとか、これを受ける学徒がいかに受けとるかを考えていては、本当の育英事業は出来るものではない。資金だけを運用して、利潤だけ分与する等の消極的な慈善行為に類することは、国家がやるべきことだ。教育の仕事は財貨の寄附のみでは駄目だ。全身全霊を投入して自ら実践を積み重ねる外ない」¹⁰⁾

このような前川喜作塾長の信念から和敬塾は設立された。和敬塾は東京の中央部である目白台に立地しているので、地下鉄の有楽町線、副都心線、東西線の各駅から徒歩10分程度で、多くの大学への通学に至便な場所である。早稲田大学、学習院大学、拓殖大学などへは徒歩で通学できる。東京大学（本郷）、早稲田大学（大久保）、日本大学（三崎町）、上智大学、立教大学、中央大学（後楽園）、明治大学（駿河台）などへは自転車で通学可能である¹¹⁾。

東京を何度も訪れた人であっても、あるいは在住者でさえ、東京都心にこのような広大な敷地を有する塾を知る人はほとんどいないであろう。訪問者の多くが、「東京の中心地によくぞこのような場所がありましたね」という感想をもつのもうなずける。

作家の上坂冬子が、『教育の忘れもの－東京の学生寮・和敬塾－』の中で

9) 高橋泰三「和敬塾設立の経過」『和敬塾10年の歩み』12～13頁。

10) 同上書、13頁。

11) 和敬塾「WAKEIJUKU」7頁。

付近の様子を描写している。

「東京・目白の椿山荘といえば明治時代の陸軍総帥として知られた山県有^{やまがたあり}朋^{とも}の居宅だったところだが、現在はホテルになっている。椿山荘と元総理大臣・田中角栄邸の間に、うっかりすると見落としそうな石の門構えがあり、『和敬塾』と書かれた銅板がかかっていた。見落としそうなというのは、銅板が緑青^{ろくしょう}で読みにくくなっているのと、間口はそれほど広くなく敷地が奥深いからだ。特に門衛がいるわけでもない。」¹²⁾

また、村上春樹は、昭和43年に入学した早稲田大学・文学部に通学するために、和敬塾の寮から東京での生活を始めている。当時の様子を『ノルウェイの森』の中で次のように記述している。

「その寮は都内の見晴らしの良い高台にあった。敷地は広く、まわりを高

和敬塾正門



写真提供）和敬塾

12) 上坂冬子, 10頁。

いコンクリートの塀に囲まれていた。門をくぐると正面には巨大なけやきの木がそびえて立っている。樹齢は少なくとも百五十年ということだった。根もとに立って上を見あげると空はその緑の葉にすっぽりと覆い隠されてしまう。

コンクリートの舗道はそのけやきの巨木を迂回するように曲り、それから再び長い直線となって中庭を横切っている。中庭の両側には鉄筋コンクリート三階建ての棟がふたつ、平行に並んでいる」¹³⁾

このように和敬塾の外観が紹介されているが、今もほとんど変わらない佇まいである。『ノルウェイの森』に記されている鉄筋コンクリート3階建ての棟というのは寮である。中庭には緑の芝生が広がり、その奥に本館がある。和敬塾の敷地の購入時から建っている旧細川邸である。細川家第16代細川護立によって昭和11年に建てられた代表的華族邸宅である。英国チューダー様式を基本とした外観で、館内に入ると、エントランス、第一応接室、第二応

和敬塾本館



写真提供）和敬塾

13) 村上春樹『ノルウェイの森』講談社、2004年、25頁。

接室、第三応接室などがあり、法隆寺の高欄をもとに卍崩しのモチーフやサラセン風のデザインを取り入れるなど独特の意匠が施されている。第一期生は寮ができるまで本館で生活していたそうであるが、現在は、各種教養講座や音楽会などを開催する場となっている¹⁴⁾。

現在は、東西南北の4寮に、最近、大学院生の寮である異寮が加わり、計529の個室がある。このように東京の至極利便性の良いところにありながら、自然環境に恵まれ、趣のある華族邸などもあり、学生が都会の喧噪を忘れて勉強し友と語らうには最適の場である。設立から約4,606名の大学生を世の中に送り出してきた。現在の塾生515人の所属大学は、約50校を超える。留学生は19カ国73人である。大学院生も37人入塾している¹⁵⁾。

新西寮・新北寮



写真提供) 和敬塾

(2) 教育理念—人格形成—

和敬塾は、外観のみから推測する限りでは、学生寮に見える。しかし、同塾は、設立当初から人間形成の場であり、修養の場でもあると考えているの

14) 筆者見学、2009年5月10日。「WAKEIJUKU」7頁、参照。

15) 和敬塾資料、2009年4月1日（留学生は4月23日）現在。

で、寮ではなく塾と呼んでいる。

「ここは和敬塾…(中略)…塾なのでありまして、和敬寮ではないのであります。塾と申しますと、先ずわれわれが想像しますのは、吉田松陰先生の『松下村塾』であり、あるいは緒方洪庵先生の大阪の『適々斎塾』であり、あるいは福沢諭吉先生が創立された『慶応義塾』等でありまして、大体においてよき指導者と生活を共にして学問知識を磨き、人格を高める、いわゆる人間形成の場であります。近代日本の全寮式の大学でもありましょう。」¹⁶⁾

次に、和敬塾の名前に用いられている「和敬」とは、どのような意味であろうか。前川喜作塾長によれば、「和」は、聖徳太子の17条憲法の第一条の「和をもって貴しとなす」から由来し、「人間と人間の和」であり、「コミュニケーション」であると解説している。「敬」というのは、同じく17条憲法第二条の「篤く三宝を敬へ」からあやかったとしているが、ただ立派な人や先輩を尊敬するというよりも、「本当の真理を敬う」こととしている¹⁷⁾。現在の和敬塾では、「和」とは同じく「コミュニケーション」であり、「敬」には、真理に加えて善、美を敬うこととして、敬を前提として和につながるものであると考えている¹⁸⁾。

和敬塾は、英才教育を通して大政治家や大実業家を育てるという考え方ではなく、塾生一人一人が幸福な人間として、人から親しまれ、尊敬され、本当に意義のある人生を送れるように支援するというものである。そのためには、財力とか名誉とかにこだわらず、自分自身の信念というものに背かない人間として行動してほしいと期待している¹⁹⁾。結果的に著名な人材も輩出し

16) 和敬塾塾友会『和と敬とー前川塾長語録ー』講談社、1983年、66頁。

17) 同上書、34頁、36頁、37頁。

18) 岩崎嘉夫。

19) 和敬塾塾友会、前掲書、70頁、52頁。

ているが、あくまで立派な市民としての教養を高め良好な人間関係を築いていくことを根本としているのである。ただし、愚昧な大衆が増えることを望んでいるわけではない。大学教育の大衆化の時代にあって、質を問わないような大衆教育のあり方に異議を唱え、国民全体のレベルアップを目指し、世界から尊敬される国民を育てようとするものである²⁰⁾。旧制高等学校のように少数精鋭でエリートを育てるという方針ではなく、戦後急増した大学生を健全な市民に育てるインキュベーターとしての塾を目指したのである。

このように和敬塾が、徳育を中心にすえた人格形成教育を志向した理由については、前川喜作塾長の近代日本の大学教育に対する批判が基になっている。

「人類社会に秩序と幸福をもたらす根本の力は、人類社会の中核となり、指導者となるべき優れた人材であることは申すまでもありません。しかしながらこの優れた人材を育成すべきわが国大学教育の現状は、知識重点主義に墮しているくらいが無きにしもあらず、教育本来の目的である徳性の涵養が、えてしてうとんぜられている傾向にあることは、衆目の等しく認めるところでございます。」²¹⁾

確かに宗教関係の大学を除けば、戦後の日本の大学教育においては徳育を目指した大学はほとんどなく、知識中心の教育であり、この傾向は現在も続いている。前川喜作塾長は、このような大学教育に欠落する部分があるのを憂うことに終始するのではなく、徳性の教育を目指して私財を投じて財団法人和敬塾を設立したのである。

「わたくしどもは、志を同じうする者が、この点を深く憂慮いたしまして、ここに日常の共同生活を通じて、将来優れた社会人となるに必要な豊かな

20) 同上書，76頁。

21) 同上書，16～17頁。

夕食時の風景



写真提供) 和敬塾

知性と、豊富な徳性とを兼ね備えた人材を養成いたしたく、和敬塾を設立いたしました次第であります。」²²⁾

この言葉には、企業経営者であって教育事業に取り組んだ塾長の気概を感じる。そして、発足当初の和敬塾は、共同生活を通じて社会人として必要な知性と徳性の両方を兼ね備えた人材を育成しようとした。その後、体育館や図書館などの施設を完備し、スポーツ系と文化系の各種教養講座が開催される。このように徳育に体育と教養教育を加えたことで、現在では、真理とともに善、美などを探求することができ、さらにバランスの取れた人格形成を行っている²³⁾。

3. 教育方針－支援中心－

本章では、和敬塾は、学生達の人格形成にどのように取り組んでいるのかについて見てみることにする。

22) 同上書，16～17頁。

23) 岩崎嘉夫。

（１）環境整備

設立当初、前川喜作塾長は、広大な由緒ある土地を購入し、「環境は人を作ると申しますが、やはり環境をしっかりとものにしないといけない」という考えから環境整備に注力した²⁴⁾。

同地の購入当時は細川家関係の古い家が雑然と建ち並んで、久しく手入れしていない庭はジャングルを思わせるものであった。前川喜作塾長は自ら斧を握り整地にあたるなど、率先して指揮にあたる。さらに、建築工事が進んでからも順調ではなく、地盤が悪く20メートルのコンクリート・パイルを千数百本も打たなければならなかったが、「関東大震災の轍はふみたくない」との前川喜作塾長の想いから、予算を超過しても頑丈な建築に向けて心血をそそいだのであった²⁵⁾。そして、誰もが驚くような自然環境に恵まれながらも利便性があり、落ち着いて勉学に励み、充実した共同生活のできる施設と設備を整備したのである。

（２）自己研鑽

次に、そのような恵まれた環境にあって、和敬塾ではどのような教育方針で徳育を目指してきたかについて見ていきたい。前川喜作塾長は、徳性について直接大学生に教えたり育てたりするのではなく、自己研鑽で身につけてもらうように提唱している。そのための支援は行うが、強制的な徳育を実施しようとするものではない。このような教育方針に関する考えが、前川喜作語録に表れている。

「しかし、ただ建物が建っているだけではいけないのであって、諸君が立派になっていただかなければ何にもならないのであります。諸君が立派になっていただくのは、諸君自らが源でございますから、どうぞセルフメードしていただき…」²⁶⁾

24) 『和敬塾10年の歩み』17頁。

25) 同上書、17～18頁。

宿泊研修



写真提供) 和敬塾

「どうか皆さん一人一人が揃って立派な人になっていただきたい。ここでそんなに英才教育をしようとか、何をしようという考えはございません。ともあれ皆さんに立派になってもらいたい。しかし、それではどうしたらよいのか、これは皆さん自身に考えてもらうのです。私どもはお手伝いをさせていただくので、決してわれわれは、ものを教えようとか、教育しようとか、そんな考えは持っておりません。」²⁷⁾

「これから皆さんが自分自身をセルフメードしていただくよりほかないのでございまして、それで私どもの仕事は、牧場のコリーのような役目をしていのだと、私はよく言っているのです。牧場のコリーは、羊の皮を取って売ろうとか、肉を売ってやろうとか、そういう考えは全くなく、ただ本能的に羊を猛獣から守り、青草を求めて一日中栄養をとって、成長してもらうことだけを望んで、後ろへまわり、先へまわり、横へ跳んで、羊を守るのでございます。」²⁸⁾

26) 和敬塾塾友会，前掲書，54頁。

27) 同上書，53頁。

このように見守りながら、「馬は河に連れて行くことができますが、水は自分で飲まなければいけないのであります。」²⁹⁾と述べているように、自ら前に踏み出して自己研鑽を行うことを期待している。そして、「自分の体験から、自分の哲学を自ら生み出してもらいたい」³⁰⁾という方針を語っている。

(3) 率先垂範

しかし、自主性にだけ任せていて、自ら徳性を学ぶことができるのであろうか。明文化されてはいないが、塾長や職員の日常の行動自体が、塾生に良き徳性を学んでもらう模範になっているように思われる。

前川喜作塾長の行動が塾生に模範となっていた証として、次のような塾生の声が挙げられる。

「塾友の声をきいていますと、結局、和敬塾というのは、前川塾長のお人柄やその教えが非常に大きかったと思うんです。創立から現在までに塾長にめぐり会って目に見えない教えを受けたという気持ちを持っている人が多いんです。」³¹⁾

「塾が出来た当時、先生がなっぱ服を着て、樹を植えたり、あっちこっちを掘り起こしたりされているのをよく見かけました。あの面接をされた塾長がそれをやっていらっしゃるというので塾生も感激し、しかもあとで聞いたら前川製作所の社長だときいて驚いたりしたのですが、そういうところが、あの当時の塾生には大変な教育だったように思います。」³²⁾

職員の姿勢から良き社会人の模範を感じる塾生も多くいた。

28) 同上書、47頁、50頁。

29) 同上書、47頁、50頁。

30) 前川喜作塾長講話「和敬塾五十年の歩みとこれから」(DVD)、2006年。

31) 和敬塾塾友会、前掲書、144頁。

32) 同上書、146頁。

「当時西寮には梶原さんという寮務さんがおられましてね。しめるところはしめて、非常に塾生を可愛がる愛情に満ちた人でした。塾生の名前や家族、友人のことまでよく知っておられ、本当にいろんな世話をよくしてくださった。…(中略)…また、塾生にオーストリアからの留学生でゲルハルトさんという人がいましたが、彼にいつも丁寧に日本語を一生懸命教えておられたし、非常に親切な人でした。」³³⁾

「寮務さんの思い出は…(中略)…学生はやっちゃいけないという麻雀をよくやりまして、怒られて追いかけてごっこをしましたよ。…(中略)…卒業して年が経つにつれて本当にいい人だったなと思いますね。今の僕だったら、こんな腕白の者を100人も相手にしたら大変だと思うけれど、その当時は自分が若くて人に対する思いやりがなかったから、なんてうるさい人だろうという反発だけが先にたちました。」³⁴⁾

このように塾長や職員が塾生達を管理するだけでなく、日頃の行為を通して社会人としての模範となっていたのである。また、そのような行為の積み重ねが学生達に尊敬の念を抱かせていたと推測できる。そして、尊敬する塾長や寮長の言葉には自然に耳を傾けることになると思われる。

(4) 塾長講話から学ぶ

前川喜作塾長は、折りに触れて自分の経験や考えを伝えていた。例えば、社会人となる前の準備として、健康、知性、信念について次のように語っている。

「まず健康です。…(中略)…身体の健全保持は『孝』になるとともに、諸君の社会活動の前提要件であります。…(中略)…次に知性を高める、学問・

33) 『和敬塾20年の歩み』246頁。

34) 同上書、246頁。

知識を修得することです。そのために勉強することです…(中略)…一方で『もののあわれ』がわかり、てんめんたる情緒、豊かな情操という心情の美しさというものも備えてほしいのであります。…(中略)…さらにその知性の開発ですが、諸君は知性をただ人から、または新聞等のマス・メディアからの単なるインフォメーションとして簡単にうるだけでなく、自分が直接、大学での講義はもちろん、図書館の書物で得るとか、共同生活において友人とディスカッションをして得るとか、当面する問題について自分として考えぬいて得るとか、いわゆる懷疑者のごとく思索を尽くして得るとか、が必要で、こうして涵養した知性は自分の血となり肉となるもので、一生自分から離れません。これが知性の裏付けされた信念となるものであります。

しかし、また、知性があり、また知性に裏付けられた信念がありましても、それが行われなければなりません。また、知性に裏付けられても、情緒的・情動的の面がしっかり裏付けられないと、信念も行われがたいと思います。知行合一といわれ、信者のごとく行動するといわれますが、正しい知識、信念は、美しい実践、行動とならねばなりません。

和敬塾の人間形成は単なる知識の偏重を採らず、塾生活において以上のような意味の健・知・情・信・行を修得、練磨するものであります。』³⁵⁾

知識の教育と比べて、徳性の教育は表現が難しく、言葉だけでは伝わりにくい面を持っているように思われる。日頃から塾長や職員に親しみや尊敬の心を持っていなければ、塾生には納得できる言葉として伝わらないだろう。

他にも、前川喜作塾長が開催していた卒業期の4年生塾生に行う就職説話懇談会の与える効果が大きかったようである。懇談会の内容を見ると、まず、人生観・世界観から説き起こし、世界の情勢や日本の産業界の現状を詳説した上で、自分の生き方と自分の性格も考えた上で、職業選択すべきことなどを助言していた。さらには、面接試験での言葉遣いや筆記試験の回答の仕方

35) 『和敬塾20年の歩み』150頁。

にまで言及し、希望者には個別面談するという懇切丁寧な指導であった³⁶⁾。実業家として成功した経験が基になった塾長の指導から、塾生は数多学ぶ点があったことと推測される。このような説明会や面談は、現在も脈々と引き継がれている。

また、塾生は、平素から塾長宅を訪問し、談話を聞き、あるいは会食のもてなしを受けていたようである。さらに、卒業時には、120名を超える卒塾生が、14、5人に分けて晩餐に招待された。美味しい牛鍋を振る舞まれながら、談笑の合間に塾長の貴重な体験談、社会に出てからの心得に耳を傾ける。最後に塾歌を唱和し、万歳と拍手でお開きとなる。帰りには塾長夫妻に玄関まで見送られ、「くれぐれも健康に気をつけて、しっかりやりなさいよ」と励まされる。塾生は、「これが、また「和」と「敬」といわれるものかと実感として味わい、…(中略)…これからの人生で如実に実践として行いたい」という想いが心の中に湧きいでてきたことが綴られている³⁷⁾。

前川塾長が、「松下村塾にしても、適々斎塾にしても、慶応義塾にしても、学問知識とともに精神的な面にも重きをおいて、それぞれ立派な人物を輩出して、その塾の存在価値が高められており、国家、社会、人類の福祉に貢献するところ大なるものがあったように私は記憶しているのであります。」³⁸⁾と述べているように、緒方洪庵の適塾、あるいは福沢諭吉の慶応義塾にしても、学問知識を修得するとともに、師と生活を共にすることによって社会人としての徳性を同時に身につける修行の場でもあったと言えよう。和敬塾は、徳育の面でそのような塾をめざしたのである。

(5) 多くの機会—著名人の講話など—

前川喜作塾長が、「社会教育事業とか公共事業とかいう仕事をするという

36) 同上書、158～163頁。

37) 同上書、107～108頁。

38) 和敬塾塾友会、前掲書、29頁。

ことは、すなわちチャンスをつくることではないかと、私は思っているのです。」³⁹⁾と述べているとおり、塾長の講話のみならず、講演会、教養講座など、学生にとって有意義だと思われる様々な機会を提供している。塾内において剣道、居合道、柔道、空手道、直心影流法定、中国古典輪読会、茶道、棋道、書道、坐禅などの教養講座を無料で開講している。絵画研究会、グレートブックス研究会、タッチボール同好会などもある。経済的理由により修学困難な学生に対し貸与奨学金制度があり、財団の基金からの支援も行っている。

和敬塾では、社会に偉大な貢献をした著名人を塾内に招聘して、塾生が自由に聴講できる講演会を年4～6回設けている⁴⁰⁾。

この講演会は学生達に、卓越した先達のことを知るまたとない機会となっている。内閣総理大臣、駐日大使などの政治家から、ノーベル賞受賞者、囲碁や柔道の名人、プロ野球選手、登山家、俳優、作家など、様々なジャンルから、著名人を招聘している⁴¹⁾。このような偉業をなした人の講話を聴講できることは、感受性の豊かな時期の若者達にその後の人生に大い

教養講座（茶道）



写真提供）和敬塾

39) 同上書、48頁。

40) 昭和32年から20年間には、のべ300人約600時間にわたり各界の著名人の講演を実施していた。（『和敬塾20年の歩み』62～63頁。）

41) 講演会への出席は自由であるが、昭和51年3月の資料によると、同年には出席率が80～85%であったと記述されているので、学生の意欲の高さが伺える。（『和敬塾20年の歩み』302頁。）

なるヒントを与えるだろうことは想像に難くない。

4. 共同生活

本章では、和敬塾の学びの場となっている共同生活がどのように運営されているかについて見てみる。

(1) 生活原則－挨拶から－

和敬塾には、「塾則」⁴²⁾はあるが、あまり学生をしばるようなものではない。塾則とともに『塾生活の指針』に掲載されている「塾生の心得」のほうがより日常的なルールであり、和敬塾の特色を良く現している。①挨拶の励行、②掃除（ラウンジ、ロビー等）、共同備品（アイロン、電子レンジなど）の使用と後始末、共同生活上のルールの遵守、③行事・教養活動への積極参加を促している。さらに、明文化はされていないが、1週間に1回は親に手紙を書いて近況を知らせるなど感謝の気持ちを忘れないこと、誠実、思いやり、けじめなどを大切にすることなどを生活原則としている⁴³⁾。

まず、和敬塾を訪問して最初に驚くことは、すれ違う学生が、知らない訪問者に大きな声で「こんにちは」と挨拶してくれることである。現在、そのようなコミュニケーションは、大学の体育会系クラブを除けば、一般の大学生にはあまり見かけられない。グローバル化時代において初歩的なマナーの1つでもあると思われるのに、現代日本の教育においては、英語教育の低年

42) 入塾資格は4年制男子大学生であること、門限が23時30分である、外泊するときは外泊届けを寮長に提出すること、教養講座へ積極参加することなどが規定されている。

43) 和敬塾『塾生活の指針－2009年版塾生活ガイドー』平成20年11月10日。生活原則にしてもあまり学生を縛るという方針ではない。和敬塾の卒業生のアメリカ人弁護士は、次のように述懐している。「何よりも条件の“厳しさ”がまず気に入ったんですよ。額面通りに受け取って、この厳しさこそアジアの精神の神髄だ、よしっ、挑戦してみようと思ったわけで…(中略)…入ってみて分かったんですが、どうやら日本式タテマエが先行していて週1回の両親への手紙どころか、塾生たちはたまに親に電話をかける程度でした。…門限も最初は厳守していましたが、そのうちに仲間がこっそり裏口をあけてくれたりして助かりました」（上坂、36～37頁。）

齢化やヒヤリングの重視などの知識修得の議論はあっても、基本的な態度については、関心が払われていない。

ただ、彼らも入塾前からそのようなマナーを身につけていたわけではないようである。入塾後、カルチャーショックとともに和敬式作法を身につける最初の関門が、4月に開催される入塾式後の新入生歓迎行事である。先輩達の前で大きな声で自己紹介し、個別に先輩に挨拶するために部屋を巡回する。上級生の塾生による委員会面接もあり、質問に対する受け答えが曖昧であったり、声が小さいとやり直しを命じられる。1年生にとって精神的に相当厳しいものであるようだが、上級生は上級生で塾の生活原則や共同意識を理解させようと必死である⁴⁴⁾。そのような先輩との交流を通して、挨拶を初めとするコミュニケーション能力をカルチャーショックとともに身につけていくのである。

このような挨拶の敢行は、塾の創生期に塾生からの意見が浸透して慣行と

入塾式



写真提供) 和敬塾

44) 「新歓は、新入塾生に対して今まで持ち合わせてきた世界観、人生観、価値観を打ち壊すまでの非常に強いインパクトを与える。受験一辺倒でやってきた青年にはまったく新地に立つ思いであろう。」(岩崎嘉夫)

なっていったようである。当時、廊下ですれ違っても知らんふりで行く塾生達もいたので、お互いに挨拶をしようということになったようである⁴⁵⁾。そのような経緯を見てみると、現代も昭和30年代も大差ない様子が伺える。教育の機会や組織の体制がコミュニケーション能力の獲得に影響しているものと思われる。

(2) 塾生による自主的な運営

和敬塾は、初代塾長の寄附行為によって設立され、財団法人和敬塾が管理しているので、自治寮ではない⁴⁶⁾。しかし、塾の規模や活動が拡大するにつれて、塾生達の意見を反映しながら運営したほうがより良い共同生活が営まれるとの考えから、塾生の各種活動の組織化や世話人の選出が行われるなど、学生による自主的な運営も導入されることとなった。昭和32年の役員会において、塾生会の設置が認められ、総務、図書、厚生、体育、文化、会計などの部署がおかれ、学生達が部長と委員の候補者をあげ、塾長が承認するという手続きが出来上がった。翌年、各寮委員会、塾生委員会などができ、翌々年には各寮の委員長を寮生全員で選出することとなった⁴⁷⁾。

現在、和敬塾の財団法人では、理事長、専務理事、常務理事などが最高経営責任者であり、寮長、副寮長、寮母が、日常の学生の管理にあたり、食堂、施設、事務所に専門職員30人が配属されている。寮長は、設立当初は教員経験者を中心となって担当していたが、現在は、企業管理職、工場長、海外法人の社長など、企業の実務経験者が担当している。このような法人の経営者や職員の指導のもとで、学生の代表である寮の委員長、部長、学年長などは、学生の意見をまとめながら、共に運営にあたっているのである。また、塾生全員は、寮の部屋の近所を中心に、6人ずつの班で組織編成されている⁴⁸⁾。

45) 『和敬塾10年の歩み』164頁。

46) 各大学に付属している学生寮は、大学に通学するための学生の住む寮のことであるが、大学生が自ら管理している寮を自治寮、大学が管理している寮を管理寮と呼んでいる。

47) 『和敬塾10年の歩み』121～122頁。『和敬塾20年の歩み』196～197頁。

日常的には一番身近な組織でもあり、小規模な組織の単位であるためか、4年間濃厚な交流があるようであり、その様子が卒業生プロフィールから伺える。

「和敬塾の四年間は今思えば、あっという間でした。…(中略)…特に五班の人達とは様々な思い出があります。ザリガニ事件やゴキブリ事件等、今にも笑ってしまいそうなものばかりです。五班は飲み会のノリや特別行事に独特の文化があり、その雰囲気は初めはカルチャーショックでしたが、だんだんと慣れてとても好きになりました。(東寮、4年)」⁴⁸⁾

このような法人と塾生との協力体制で塾の運営が進められているが、両者間の対立が起こったこともある。設立からしばらく経って、塾費値上げをめぐってである。昭和32年秋学期から月500円の塾費値上げに対して、一部の塾生から反対の声があがり、一寮長の不正事件にもからみ、非難は塾の経営問題にまで及ぶ。世間の相場と比較すると格段に安い塾費であり、塾費の値上げは、食堂経営の赤字によるやむを得ない措置であったが、塾の経営に対して未熟な理解しかできない学生による騒動であった。漸次、塾生が塾の真意を理解するに至り、関係修復するとともに、食堂を委託から直営に切り替えるなど、食堂経営の見直しもなされる⁵⁰⁾。このような法人と学生との対立が一時あり、血気盛んな年頃の学生達が集まっているゆえの日常的な小競合いはあるにせよ、双方の協力関係の上に、順調な運営が継続されている。

(3) 祭事－競争と協調－

和敬塾では、体育祭、山の手一周ハイキング、餅つき大会など、それぞれ特色のある祭事が実施されている。

48) 岩崎嘉夫。

49) 「WAKEI」和敬塾、84号、平成20年9月20日、62頁。

50) 『和敬塾20年の歩み』57頁。

山の手ハイキング



写真提供) 和敬塾

例えば、体育祭は、9月下旬から10月上旬の1カ月にわたって開催され、寮対抗や個人対抗で試合が繰り広げられる。種目は、マラソン、テニス、水泳、柔道、サッカー、卓球、剣道、野球、ドッジボール、リレー、バレーボール、バスケットボール、相撲、腕相撲、障害物リレー、綱引き、騎馬戦など多種で、五人六脚や碁石リレーなどというユニークなものもある。和敬塾の機関誌を見ると、その悲喜交々が綴られている。

「今年のマラソンでやらなければならないことは明らかだった。…(中略)…それは『底上げ』。…(中略)…私は和敬に入塾してから、北寮は3位、2位、2位と配点の高いマラソンでロスをしてきた。北寮には毎年、6名以上表彰される人間がいるのに、なぜ勝てないのか。理由は簡単だった。みんなが気付きそうでなかなか気付かないもの。それは、参加率&全体のレベル。どんなに速い人間がいたとしても、全体競技であるマラソンでは大した利点にはならない。いかに全員が参加し、一人一人が上位を狙って走るかが重要であり、これが達成できた時には勝てるはずである。そう考え、キャプテンに立候補し、マラソンを受け持つこととなった。…(中略)…早速、帰寮日の翌日

から全員を集合させ、練習を開始した。ただ惰性に走るのではなく、走る前のミーティングでコースの注意点や、うまく走るコツを教えた上で、全員に走ってもらい、時には2周走することで、基礎体力と和敬マラソンにおけるテクニックを身に付けさせた。そして、早めに北寮内での順位を決め、順位別に練習をし、ブロック別に走り方と役割を決めることで、マラソンにおける一人一人の参加意識を上げていった。…(中略)…この練習が功を奏し、北寮はマラソン本番で、見事1位を勝ち取ることができた。何と9年ぶりの快挙らしい。結果を知った日、嬉しさと興奮で一睡もできなかった。(北寮、4年、マラソン出場)」⁵¹⁾

『『優勝』この文字が最も似つかわしくない競技。それが『五人六脚』だろう。私も含め、この競技で優勝できと思っていた東寮生はいないだろう。ましてやあのように感動できるなど誰が想像できただろうか。…(中略)…キャプテンになった時、正直最下位にならなければ良いだろうと思っていた。そ

体育祭



写真提供) 和敬塾

51) 「WAKEI」 6 頁。

れは、東寮創設以来最高が、一昨年の三位、それ以外は最下位だったという実績とともに、エントリー者を見てもあきらかだった。早朝の練習には遅刻する。一限があるだの体調が悪いだのと欠席者は多く、当日の出走直前までレギュラーは決定しなかった。しかし、一部の毎回出席してくれた人や、当日参加してくれた卓郎達の熱意を見て、やれるだけやってやろうと思い、本番までひたすら練習をした。練習をこなすうちに、もしかしたら優勝を狙えるのではと思ってきた。思い込みの力とはすごいもので、出走直前に『一組目でひき離し、二、三で維持、四で少し離して五組目で逃げ切れ！』と勢いで言った所、それは現実のものになった。その後はよくおぼえていないが、予想外に感動し、みんなで騒ぎまくった。騎馬戦以外でここまで熱くなったのは初めてだった。あきらめるな『やればできる』ということを実感した瞬間だった。(東寮、4年、五人六脚出場)⁵²⁾

「一年生ながらも代表として選ばれたことに責任とプレッシャーを感じつつも、『これは自分に与えられた見せ場だ！』…(中略)…だがしかし、まさかの接戦。人は見かけによらない。あれよあれよと勝負が大将にまで回ってきてしまった。前祭種目での東寮常勝ムードが漂っていただけに、絶対に負けられないプレッシャーが一挙に肩にのしかかってきた。ワン、ツー、スリー
申し訳ございません、負けました。来年こそは勝つと固く心に誓い、筆を
擱かせていただきます。(東寮、1年、腕相撲出場)」⁵³⁾

大学の体育祭が、体育部に所属する選手の学生が中心になりがちで、一般学生には活躍の場があまりないのとは様相が異なる。強制ではないが多くの学生が積極的に何らかの種目に出場している。自分が参加しない種目に関しては、寮ごとに応援団を編成し大声で声援を送る。このような寮や個人対抗などで、仲間と競い合う中で、協調性や自主性を育てているように思われる。

52) 同上誌、29頁。

53) 同上誌、31頁。

5. 和敬塾の成果と意義－塾生の言葉より－

このような和敬塾の共同生活を通じて、前川喜作塾長が目指した「和」と「敬」を学び、どのような社会人として巣立っていったのであろうか。どのような業界で就職しているかの詳細なデータに関しては、財団史⁵⁴⁾に詳しく紹介されている。また、財団史や機関誌⁵⁵⁾などから、現役学生や卒業生の言葉を見てみると、和敬塾での成果として、コミュニケーション、人格形成、尊敬の念を挙げているものが多い。本章では、塾生の言葉を中心に和敬塾の成果と意義を探ってみる。

(1) コミュニケーション

コミュニケーションに関しては、多くの塾生が体験できたことを述べている。

例えば、芸大の指揮科を首席で卒業しオーケストラの指揮者として活躍する塾生が、「音楽をやっている者とはとすると人間関係がせまくなりがちです。…(中略)…そうならず仲間をいっぱい作って人生論を語りあえたのは和敬塾のおかげです。」⁵⁶⁾と語っている。現在の塾生もコミュニケーションについて学べたことを卒業記念に語っている。

「4年間を振り返ると、様々なことがあったが、この和敬生活において学び、感じられ得たことは『人とのつながり』の重要さである。部屋廻りや体育祭、山手一周ハイクなど様々な行事があったが、すべての行事で一貫して根底にあったものは『人とのつながり』であった。これらの行事において、『人とのつながり』を実感することができたのは、和敬での普段の何でもない生活自体が、1人暮らしや実家暮らしでは味わうことの出来ないものであ

54) 『和敬塾10年の歩み』、『和敬塾20年の歩み』などの財団史。

55) 「WAKEI」。

56) 上坂冬子、27頁。

たからだと思う。今、考えるとこの4年間の無駄とも思える何でもない生活が本当に貴重な時間であったと思う。…(中略)…最後になりましたが、素敵な場を提供して下さった寮事務所の方々、先輩、同輩、後輩の皆様本当にありがとうございました。本当に楽しい4年間でした！！2008年2月28日退寮日早朝。(西寮、4年)』⁵⁷⁾

「4年間の和敬塾北寮での生活は私を大きく成長させてくれました。私は大学で体育会の部活に所属していたため和敬塾の行事等になかなか参加することができませんでしたが、普段の日常生活から和敬塾の素晴らしさを感じました。特に『あいさつの徹底』と『上下関係』は私を大きく成長させてくれました。まずその2つを徹底的に叩き込まれたのが新歓行事でした。(北寮、4年)』⁵⁸⁾

卒業してからも共同生活を通じた友人づくりが自分の人生において重きをなしていることを語っている塾生も多い。

「私は早稲田大学ですが、マンモス大学ですから各個人の存在が非常に小さなものになって、本当の友人ができないということをひどく不満に思っていたわけです。ここに入ってきて、それとは違う、個人個人が決して埋没せずに友人同士が接触し合える場なんだということ、それがやっぱり何といっても一番大きいんじゃないかと思いました。(志方)』⁵⁹⁾

「4年間通じて一緒にいたということになると、やはり終生の友達というような形になっておりますね。(棚岡)』⁶⁰⁾

57) 「WAKEI」75頁。

58) 「WAKEI」89頁。

59) 『和敬塾20年の歩み』245頁。

60) 同上書、245頁。

「和敬塾の良さというのは、塾に入っている時はさほど感じないかも知れない。特に卒業して5年経ち10年経つとわかってくるのですね。困った時に相談する相手なんかも、塾生活を共にした友が多いですね。(松原)」⁶¹⁾

「塾は青春そのもので、かつ、非常に豊かなものでした。もし、塾の生活がなければ、今でもあれだけ青春が豊かで、誇れるものではないような気がする。大学との違いは、大学が“点”で、和敬塾は“線”のような気がする。…(中略)…塾の友達とは、ずっと長く今もつき合うけれども、大学の時の友達とは、クラブの友達とのつき合いが少しあるだけです。(水野)」⁶²⁾

また、和敬塾はいろいろな地域や大学から大学生を受け入れていることから、学閥や地縁を超えた人間関係が築けたことを長所と感じている塾生も多い。

「私も一番良かったのは友達がまず作れたということですね。県人会や学校の寮もありますけれども、県人会の寮だったらほとんど同じ地域の出身の友達だけだし、学生寮だったら同じ学校の友達だけ。それが和敬塾ではミックスされて、日本全国から集まった各大学のいろいろな友達と知り合い、本当の友達ができた。そういう点は非常に良かったと思いますね。(溝手)」⁶³⁾

以上のように、在塾中は様々な大学生と色々な機会を通じてコミュニケーションが構築でき、そのことが基盤となって卒業後も友情が継続している様子が見て取れる。

61) 同上書，245頁。

62) 同上書，249頁。

63) 『和敬塾20年の歩み』245頁。

(2) 人格形成

塾生にとって、人格形成の場であったという意見は多い。前川喜作塾長が目指した徳性の教育の成果であると思われる。

「私は『人間形成』の面で和敬塾の時代は非常に大きな意味があったように思いますね。…(中略)…同じような考えをもった同世代の者と自由に意見の交換もできて、共同生活から学ぶことができた。いわば本当の意味での人間修養といいましょうか、人間というものは自分一人だけでは生活できないので、集団社会での一員になるためのトレーニングの場であるというようなことを実感しました。これは私の一生を通じて変わらない思い出であり、また大きな財産をえたと思いますね。(沼田)」⁶⁴⁾

「4年間を通して自分自身本当に変わったと思う。1年時の自分が、4年後の卒塾式でまさか壇上で歌うことになるとは予想もつかなかっただろう…(中略)…周りの仲間に支えられて、時には騒いで、時には真剣に考えてほんまに最高の4年間やと思う。1人暮らしとったら今の俺は生まれてなかったやろなと思うと、ムカつくこと、和敬やめよかと思ったこと色々あったけど、ほんまよかった。(西寮、4年)」⁶⁵⁾

「大学では、いろいろ学問を習いましたけれども、和敬塾というのは、人間形成の道場という気がします。とにかく全国津々浦々から、いろんな人が集まり、いろんな大学、いろんな専攻の人と、深く接触できて非常にうる所が多かったわけです。(松原)」⁶⁶⁾

「良きにつき悪しきにつけ、今日の私をつくり上げた道場だった。社会的

64) 同上書、244頁。

65) 「WAKEI」78頁。

66) 『和敬塾20年の歩み』249頁。

に立派になるためには、たくさんの立派な同僚が必要なわけで、そういう意味で、私は大学卒というよりも、塾友というほうを誇りに思っています。(丸井)』⁶⁷⁾

ここでは、共同生活を通じた同世代の学生達との緊密な交流が自分の人格形成に非常に役立ったことを述べている。

(3) 尊敬の念

さらに、尊敬の念について語っている塾生も多い。和敬塾での「敬」というのは、ただ立派な人や先輩を尊敬するというよりも、「本当の真理を敬う」こととしている。ただし、真理を敬うという心を持ち得たかどうかについては、学校や家庭における教育なども含めた多面的な評価が必要であると考えられるので、今後の課題としたい。和敬塾では、そのような意味としては用いていないのだが、一般的な理解として捉えられている「立派な人や先輩を尊敬する気持ち」が豊かに育ったように見える。例えば、前川喜作塾長への尊敬の念には、卒業生の何人もが語っている。

「塾をつくられた時も大きな決心をされたと思うのですが、何分若いものの集まりで、いろいろ無理なことをいった者があったり、失望やら心配されたこともあったと思います。しかし現在では、卒業生もみな感謝していますし、前川先生の初期の目的は十分果たされていると思います。(松原)』⁶⁸⁾

「社会に出てから、初めてそう思う（感謝する）人も多いと思います。(水上)』⁶⁹⁾

67) 『和敬塾20年の歩み』249頁。

68) 『和敬塾10年の歩み』168頁。

69) 同上書、168頁。() は、筆者加筆。

「これだけの事業をされた場合、実業家であればその資本に対する見返りというものを考えます。しかし、教育という場合はそれがありませんことかも知れませんが、それにしても人づくりという場合は、その成果が必ずでてくると思います。この間、『自分はこれだけのことはしたけれど、私の墓に何人かの人が訪ねてきてくれる日があればそれでいい』といわれたのを聞き、自分の欲、利害関係を一切すてて事業にかかられたんだな、と思い、いっそう人格の偉大さを感じました。(水上)」⁷⁰⁾

「本館にいた頃でしたが、洋式の便所の使い方をゼスチャー入りで教えてもらったことがありました。僕たちにすればそんなことまでと思ったのですが、あれも子供を愛する親心のほかありませんね。(柳川)」⁷¹⁾

「前川先生は塾生の就職、結婚または子供が生まれた時の事なども、親身になって考えてくださいますね。(松原)」⁷²⁾

「頭で考えているだけでなく、直接塾生の中へは行ってきていただけますね。おいそがしい体ですし、こういうことはなかなかむずかしいことだと思いますね。(柳川)」⁷³⁾

「こういう塾をつくっていただけただけでなく、後々までみて下さるという事は、前川先生ならばこそできたことだと思います。(相京)」⁷⁴⁾

「卒業してだんだん年が経るに従って、前川塾長の有難さとか、偉さが判ってくるんですな。(志方)」⁷⁵⁾

70) 同上書、168頁。

71) 『和敬塾10年の歩み』168頁。

72) 同上書、168頁。

73) 同上書、168頁。

74) 『和敬塾20年の歩み』250頁。

「学生時代は、観念として、塾長は偉いと思っていた。卒業して社会をいろいろ見るにつれて、その本当の偉大さが判り、…（水野）」⁷⁵⁾

このような尊敬の念があってこそ、塾長や職員の言葉が真実として心に刻まれるのであろう。

以上のことより、和敬塾の共同体意識の醸成がどのような意義を持つかについて総括したい。

和敬塾での生活共同体では、塾生は、お互いに「からむ」と呼んでいる「すり合わせ」の過程で他者とフリクション（friction：摩擦）を起こしながらも、切磋琢磨し、自分の個性や才能を確認し、新たな世界のコ・クリエイション（co-creation：共創）を行っているのである⁷⁷⁾。

「すり合わせ」とは、機械の仕上げ職人がヤスリやキサゲで面を平らにしていって行くことである。作業だけでなく、機械、技術、集団、あるいは企業と顧客などとのすり合わせも考えられると想定している⁷⁸⁾。

一方、このような共同生活は、自己の確立にも役立っている。「自分はどのような人間か」、「他者との違いは何か」と、他者を知り己を知るという過程を通して自己を発見できる⁷⁹⁾。

さらに、他者との関係性を築く中で、自分はまわりに生かされていることを知り、集団に対して親密な連帯感を持ち、心のよりどころとなる共同体の大切さを感じるなど、和敬塾に学ぶ意義を再発見する⁸⁰⁾。個と全体の循環関

75) 同上書、250頁。

76) 同上書、250頁。

77) 岩崎嘉夫。

78) 前川正雄理事長講話「和敬学の提唱」平成20年3月。これを裏付けるように、前川製作所では、顧客から「こういうものが欲しいよ」と言われなくても、日頃のすり合わせから自ずと欲しいものがわかり、新製品を次々に開発している。詳細は、信夫千佳子『ポスト・リーン生産システムの探究－不確定性への企業適応－』文眞堂、2003年、第10章、参照。

79) 岩崎嘉夫。

80) 岩崎嘉夫。

係が生まれ、融合がなされるのである。

このような共同生活の現代的意義について、前川製作所会長でもある前川正雄現理事長は、次のように述べている。

「偏差値教育では人間形成はむずかしい。和敬塾も30年経ち40年経ってくと、『これは大切なことなのだ』という積極的な感じをもつようになった。日本の特徴はやはり『共同生活による人間形成』であると考え始めた。…(中略)…最近の日本の社会現象で共通しているのは、基本的に家庭教育という“すり合わせ”が出来ていないこと。それが出来ていないから当然、学校生活の“すり合わせ”も出来ていない。この二つの“すり合わせ”が出来ていないのに社会生活の“すり合わせ”が出来るはずがない。その不足部分を補うのが和敬塾という共同生活でやってきたことだ。学校教育、家庭教育で欠けているものを和敬で解決しようとしている。…(中略)…世間のみんなも『それは大事なと気がつく』寸前まで来ている。」⁸¹⁾

和敬塾では、人は成長過程で共同生活を経験することが必要であり、生活共同体を通して、感じる、悟る、学ぶという人間的成長なくては、社会の永続的な発展が危ぶまれると考えているのである⁸²⁾。

近年のような高学歴化の時代にあっては、高度な知識を身につけただけでは、エリートとは言い難い。さらに、現代のエリートは、戦前のように特権階級として存在するのではなく、一般市民と共にあって絆を深めることで、世の中に真に貢献できる道を見つけることのできる者ではないだろうか。そういう意味からすれば、和敬塾では必ずしもエリートの育成を目標とはしていないと述べているが、社会に必要とされる真のエリートの育成を行っていると言えるだろう。

81) 前川正雄理事長講話「和敬学の提唱」平成20年3月。

82) 岩崎嘉夫。

6. 結び—現代日本の大学教育に求められること—

このような共同生活で得ることのできる社会人基礎力とは何であろうか。

第一に、集団生活でのルールの遵守を学べることである。和敬塾では、ある程度心得ている学生が多いので、厳格な運用がなされなくても、他人に迷惑をかけない程度の緩やかなルールの基で共同生活が営まれている。ルールを守れない学生達であれば、この点から教育しなければならないだろう。そうでなければ大学では履修に支障を来すと思われるし、職場では分業体制で仕事をしているので、円滑に仕事を進めることはできない。

第二に、学生達同士で切磋琢磨することで、自分の能力を高め、チームワークを学べることである。和敬塾の体育祭では、マラソンでも五人六脚でも励まし競い合うなかで、個人の運動能力を向上させながら協調性も学んでいる。現代企業では、日々のグローバル競争の中でより良い製品やサービスを提供しようと凌ぎを削っている。個人においても、学生達の就職活動を見れば、日本人学生と留学生が入り交じって競争している状況である。大学に全員入学できる時代にあっては、日常の教育現場に競争原理を導入することが重要であると考えられる。競争は、社会に出れば求められることであり、切磋琢磨することによって友情も育まれるのである。

第三に、良好な人間関係を築くことによって、精神的な豊かさを感じられることである。経済産業省の定義では、社会人基礎力に礼儀作法やマナーを含めないとしているが、和敬塾では、お互いの尊敬を前提として、挨拶を始めとした良好なコミュニケーションの構築は重要だと考えている。塾生の多くは、様々な大学や地域の出身の学生達とかかわる機会があり、在学中に気持ちを通じる友人と深くかかわり、卒塾後も長く友情を維持している。都市化によるコミュニティの崩壊、核家族化、少子化の時代にあって、このような人間関係を持てることは精神的な拠り所となり、社会人としても個人としても人生を豊かにするものと思われる。

翻って大学での学生生活を見てみると、年々学生同士の共同意識、大学への帰属意識などが薄れつつあるように思われる。筆者が関係した大学では、15年ほど前から、学生の悩みとして、「友人ができない」というのをトップに挙げる学生が増えてきた。クラブやサークルに所属する学生も減ってきている⁸³⁾。大学生活では授業を受けているだけで、アルバイト先の職場が帰属意識を持つ唯一の集団であるという学生も多い。あるいは、そういう集団を持たない学生も少なくない。よって、孤立した状態で大学生活を送っている学生もいるのである。

まずは、戦後の大学教育のマスプロダクション化が影響を及ぼしていると考えられる。工業製品を大量生産するように多数の学生に大学教育を効率的に受けさせる方法として、多くの大規模校、特に文系では、受講生の多い大教室講義が当たり前となった。教科書による文字媒体と講話で知識を伝授するのが中心である。日本人の引っ込み思案な性格からか、そのような大教室で質問や議論をぶつけてくる学生は減多にいないし、近年では静粛に授業を受けるという最低限のマナーを守らない学生も増えてきた。適塾のように教師と学生が膝詰めで、学生同士も議論しながら学ぶという場面が極端に少なくなったのである。

さらに、現代の二十歳前後の学生が置かれた家庭の教育環境が大きく変化してきたのも原因と思われる。戦後の高度経済成長の時代には、地方から都市への人口流出によって核家族化が進み、さらに近年の少子化によって一世帯あたりの家族人数が少なくなった⁸⁴⁾。また、両親の長時間労働、子供の習

83) 近畿経済産業局の資料によれば、今どきの若者が育つ環境変化として、かつて社会人基礎力を育てるヒドゥン・カリキュラムと呼ばれていた部活動が衰退していることを指摘している。(大西逸朗「近畿経済産業局地域経済部産業人材政策課」(基調講演) なぜいま社会人基礎力育成が必要とされるのか—その意義と内容—」全国四系列(経営学・商学・会計学・経営情報科学)教育会議第26回大会、桃山学院大学、平成21年8月8日、報告概要、7頁。)

84) 幼少期から異なる世代とコミュニケーションをとる機会が圧倒的に減少している。2004年には、三世帯世帯の割合が9.7%に減少し、平均世帯人員が2.72人となった。(厚生労働省『国民生活基礎調査』2004年。)

い事などによって、家族が一緒に過ごす時間が少なくなってきた。さらに、学習塾の拡大から推測されるように、家庭教育においても知識の修得に重きがおかれ、社会人教育がお座なりにされている場合もある。これらのことから、社会を構成する最小単位の共同生活を送る家庭において、最低限の社会人基礎力を身につけていない学生が増えてきているように思われる。

経済産業省が、社会人基礎力の養成を提唱しているのも、近年のこのような状況を危惧しているためであると推測される。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」のうち、前二者は個人だけでも取り組めるものであるが、3番目の「チームで働く力」に関しては、チームがなければ始まらない。和敬塾の共同生活の成果から鑑みれば、前二者においてもチームの効用は見逃せない。

以上のことから、大学における社会人基礎力の教育として、次のようなことが検討課題となろう。

- ①講義科目をできるだけ少人数へ転換する：少人数化によって、教員と学生とのコミュニケーションを図りやすくする。座席指定制を導入して、授業中の発言や態度を評価する方法も考えられる。
- ②ゼミナールの運用方法を再検討する：教師と学生がより良くディスカッションできるよう再検討する。適正人数、教室環境、教育方法などの検討が必要である。
- ③チーム学習を導入する：課題にチームで取り組むような授業を展開する。
- ④社会人としてのマナーやルールを学ぶ講座を設ける。
- ⑤社会人の講話を聞く講座を設ける。
- ⑥インターンシップを積極的に導入する。
- ⑦達成度別にクラスを編成する。
- ⑧相対評価を導入する。
- ⑨課外活動への参加率を向上させる。

これらの項目は、すでに多くの大学で導入され、検討されている事項も多いが、社会人基礎力の面からの再検討が必要であろう。現代日本のような核

家族化・少子化の時代には、和敬塾の共同生活を通じた社会人基礎力教育は、大いに参考になろう。今後の大学教育の取り組みには、大学のみならず産業界や小中高等学校との連携、ならびに家庭との協力体制も必要であると思われる。

謝辞) 財団法人和敬塾の岩崎嘉夫専務理事には、現地調査を快く受け入れていただいた上に、インタビューにも懇切丁寧にお答えいただき、深謝申し上げます。また、同塾の塾事務所グループの中島あずさ氏には、資料収集にご協力いただきました。紙面を借りてここに謝辞を申し上げます。

(しのぶ・ちかこ／経営学部教授／2009年11月2日受理)